

# 海獣と人

## カリブ海の捕鯨事情③

SVG

セントルシアからわずか30人しか乗れないジェット機で、セントビンセント・グレナディーン(SVG)の首都キングスタウンへ向かった。座席が決められていない、オープンシートのジェット機は初めてだったので興奮していたが、30分で着いてしまった。空港からホテルまでのタクシーは、乗っ取られてもずっとカタカタと歩いて、互いがきつく距離の間に時間がかかった。SVGはあまり雨が降らず山がちな地形で作物が育ちにくい。ため、欧州人にとっても魅力がなかった。ほかのカリブの島々を比べて100年くらい遅い。最後の捕鯨地である。そのため現在

セントビンセントというメインの島と、その南部に広がる約600の小さい島々から構成されるグレナディーン諸島の北部半分で一つの国となっているので、国名が長い。

キングスタウン港からラエリーに乗って約30分、グレナディーン諸島の中でのちばん大きく、人口が約5300人のベグウェイ島に到着した。ベグウェイ島は、国際捕鯨委員会(IWC)管轄下の先住民生活捕鯨といふ区分による捕鯨活動を行っており、クジラの船として知られている。一年当たり4頭のサトウクジラの捕獲が許されている。ベグウェイ島は、自分たちのことをセントビンセント人とは言わず、ソレナデ

史は短い。もともと無人島であったが、17世紀後半から西欧人の植民地支配が始まった。1833年に奴隷制が廃止されたことで、サトウキビのプランテーション経営は衰退。農業し、60年代には水産業が主な収入源となった。一方で、米国の捕鯨活動は60年代と70年代にピークを迎える。この時期にベグウェイ島の若い漁師たちが米国の捕鯨船団に雇用され、捕鯨船に乗り込み技術を獲得していった。75年ごろには島民だけにによる捕鯨が開始された。87年にはクジラを見つけてからの機件連れの捕鯨手順や分け前などの捕鯨に関する条例ができていた。ベグウェイ島の捕鯨の歴史は19



42 松田 彩  
期生 松田 彩  
1988年7月広島市生まれ、35歳。米国・オハイオ州立大学環境科学専攻、中国・北京大学政治学系中国政治学専攻、同国12年間生活した。2021年度松田政経塾に入塾した。現在は、為政者を志す。食料安全保障や難民防衛などの観点から、日本の一次産業を強化したいと志す。特に漁業振興を提議。海洋大国・日本を目指す。



SVGの捕鯨博物館で鯨骨撮影

## 島の記録が語る歴史

そのために現在

### 聖島ベグウェイ

SVGは、人口約1万人2000人の島、そのうちの約1万人が住んでいるセ

セントビンセントというアイランドというアイランドというアイランド。ちなみに、ベグウェイはカリブ海諸島の言語で「島の島々」を意味する。ベグウェイにおける捕鯨

10年ごろで、約1000人の捕鯨従事者がいたが、現在は10人ちょっとである。IWC管轄下の先住民生活捕鯨というカテゴリーには、ほかにロシアのチュク

チ、アラスカのイヌピット、トコト、グリーンランドのイヌピットの捕鯨が入っている。これらは先住民によって行われているが、ベグウェイ島の捕鯨は、アフリカから連れて来られた黒人奴隷の子孫が主なので、実際は非先住民による捕鯨であることや、後述されるクジラを捕獲するところ

ベグウェイ島の伝統が、国内外で物語を醸したこともあった。

(つづく)



ベグウェイ島からの眺め。左手前の無人島であるセンプル・ケイに日本が無償資金協力した鯨骨処理施設が見える



クジラの壁画